

学校教育の対象からは問題はあるのではないか。H・R 担任に期間中の指導を期待したり、また生徒の自主的なプランだけには現在は無理がある。食事準備一ハンゴウ炊さん——にも相当時間がとられている。短時間の行事の中で余りにもこの時間の占める位置は大きい。特に中学の場合は初経験で、あと始末などでスケジュールが遅れがちである。この時間もレクリエーションとする考えもできるが活用の道を見出したいものである。

3. あとがき

林間学校の目標が高く掲げられているのに対し、その成果が不十分であるのは何か、今まで挙げた諸問題もその理由であるが、これらの対策と今後の問題点を二、三述べてみたい。

まず、H・Rの校外活動として担任の負担の大きい、この行事を、教師集団の指導体制に切りかえることである。そして、高校の三回にわたる行事を二回にし、泊数も4泊と一日増やすことである。これは一つの提案であるが、H・R内での狭い人間関係を越えて新しい友情も生まれ新鮮なグループ活動を自主的に実行する可能性が生れるものと思う。やや惰性的になっていた友人（グループ）からも解放され、キャンプ内での生活にも規律さが見られ、グループ日誌、キャンプ日誌などで生活の行動を反省させる機会をつくることもできよう。

余暇の善用を積極的にさせたい。林間学校での余暇の利用は生徒が自主的に計画し実行するのが望ましいが、現地ガイドつきの登山指導（希望者に限る）や全員のテーマ別討論への参加、また奉仕活動などを予め計画されるようにする。

合宿は学校教育の中でどういう位置を、占め、意義があるのだろうか。我々教師集団の中にも討論が十分でなく相互のコンセンサスを得ていない、しかし教師生徒の人間関係は教室内の教壇の上からは発見されないもので、教師がつくったプランと、生徒がつくったプランをと相互に重ね合わせ、生徒の主体性を活かしつつ生徒とともに実行してゆくところに、相互理解も生まれ、生徒相互の人間関係のよいアドバイザーとなるものであると思う。

VI 家庭教育と学校教育の接点

白井 宏

生徒は、家庭と学校とのよき協力関係のもとで成長していくものである。しかし現実に、その協力関係が円滑良好にいっているとは必ずしも言えない。P.T.A.という組織が、その本来の機能を果し得ず、学校に対

する財政援助機関になり下っていたり、学校に対する不当な圧力機関になっていたりする。自分の子供のことには熱心であるが、他の子供のこと、学校全体・教育全体という大きな見方が出来ず、それぞれが孤立しばらばらである親達、P.T.A.は何か自分とは関係の無い別物の組織であると考え、無視、無関心である教師達、さらにそういう現状を改善することに消極的であり、ある場合にはそれを利用しようとする傾向さえ見られる教育行政の問題、根は深いと言わねばならない。

さらには、そういうものの全てを覆う「受験体制」という重圧、それが産み出す競争、選別という効率本位のものの考え方、悪しき意味での功利主義的社會風潮にまで考えを拡げて行くと、絶望的ですらある。われわれはそういう状況をどのような点から切り拓き、変革して行けばよいのか。現実の小さな具体的な問題を大切に拾いあげながら検討して行くこととしたい。

現実 その1 一学校の問題

環境調査表 新年度に必ず全生徒に提出させる。これには大きく2つの問題があるように思われる。

その1つは、記載させる項目の中に不必要的ものが含まれているのではないかということ。つまり、親の学歴、副保証人等である。親の学歴は本人の教育には関係が無いばかりか、その記述によって、無意味、有害な優越感、劣等感を生み出したり、教師の先入観が形成されないとは言えない。又、副保証人は、保護者が学費支弁不能になった場合の保証のために書かせるものであろうが、まず必要がないと思われる。

次に2つめは、これだけ懇切丁寧に書かせた環境調査表を、学校側はどれだけ利用しているかということである。全く利用していないとは言えないが、もっと活用されてもよい。筆者は数年前に家庭訪問を行ってみた。本校は制度化も義務付けもされておらず、そのうえ通学範囲が相当な広範囲であるため、休日毎に1日4～5軒ずつしか訪問できず、かなりの期間を要したが、しかし環境調査表の記述が現実的ふくらみを持ち、本当の意味の環境調査には大いに役立ったと言える。ただ家庭訪問には、そういう成果と同時に、違った意味の問題点が無いとは言えない。

父兄個人面談 本校では夏休み、冬休みのそれぞれの初めに実施している。たとえ20分か30分でも、保護者と教師が個人的に直接話をすることは、意味があることであり、このこと自体に疑問を持つわけではないが、それを認めつつもやはり若干の問題をも同時に感じないわけにもいかない。

その1は時期の問題である。何れも休暇に入つてから（そう決められているわけではないが）行う習慣があるので、担任教師にとってはかなりの負担である。又、夏休みはともかく、もう1回は、年度初めか、あ

るいは年度の終わりという時期の方がより意味があるのではないかろうか。年度初めに行うとすれば、教師の教育に対する考え方や、家庭からの注文というのも語り合えるし、又、年度の終わりであれば、総括的な話し合いが可能になるだろうからである。

その2は内容についての問題である。どうしても勉強、成績のことが話題の中心になりがちである。これは1学期末、2学期末という何れもテストの直後という実施時期の問題とも関係しているだろうし、又、日常接觸の少ない親と教師の間では、それら以外の共通の話題に乏しいという事情もある。そして、その勉強、成績とは、結局その生徒個人のことであり、話が教育全般にまで広がって行くことは難しく、「国語はまあまあだが数学がやや遅れているようです。」とか、「努力さえすればもっとできると思いますが。」とか、「成績が悪いので学校へ来るのが気が重い。先生にお会いするのが恥ずかしい。」とかいった決まったようなことばがかわされて終わってしまうのである。

折角のこの制度をもっと実のあるものにするために私は今ひとつの考え方を持っている。それは、個人面談でなく、複数懇談にするというものである。グループピングなどに難しい点もないわけでもないが、何人かの親と同時にじっくりと話し合いをして行く中で、どの親も結局は同じようなことを考えているのだということが、親どうしで実感され、さらにそれらについて、さまざまな意見や感想、学校等に対する希望、注文などが出てき、まとまってくる。そういうことが期待できるのではないだろうか。学級全体、学年全体等の、比較的多人数の保護者会の集まりでは、あまり意見も出ず、討論もなかなか深まって行かないが、4,5人という少人数であれば親や教師も話しやすいのではないかと思う。

現実 その2 一家庭の問題

具体的なことで考えて行こう。かって家出事件があった。Aという生徒である。B・Cという2人の生徒がAと一緒に、あるいはやや遅れてやはり家出をするつもりであったという。DはAに対して資金カンパをして援助した。4人とも高校1年生の女生徒であり、A・B・Cの3人は筆者のクラスの生徒であり、DはAと中学時代の友人で、今は他の高校に通っている。

こういうことが起ったのは、教師の日頃の指導、生徒との接觸の不足ということがその大きな原因のひとつであるということは事実であり、反省させられたが、それとともに、この事件を通して、生徒どうしの友情というもの、あるいは親子、家庭の問題についても、教師として実際にさまざまのことを考えさせられたのである。

Aの家出の原因是、成績不振、勉強、学校に対する

興味、意欲の喪失等いろいろなことが相乗された結果であろうが、本人は「家庭が面白くない。特に父親がうるさすぎる。」と言っている。食事の仕方、電話のかけ方、勉強の仕方(朝型がよいか夜型がよいか)等々すべての点にわたって父親が細かく注意をしそうというのである。父親もA本人もそれが悪意によるものでは全くないということを言っているのだが、Aにとっては何とも堪えられることなのである。母親は、父親とは反対に、物静かな万事に控えめな性格のようである。父親は「母親が頼りないから私が1から10まで注意しなければいけない」と言い、「それなのに子供がこんなことをして、私はほんとうに情無い」と残念がる。性格的なものもあるが、ひと言で言えば、親が子供の現状をよく理解できていない、子供の成長に充分ついて行けていない。そう言えるように思う。

それにもまして私が気になったのは、B・Cの場合である。B・Cの2人は何れもAの親友(本当に親友と言えるのかどうか)で、Aから、家庭のことによく愚痴話を聞かされ、同情し、それなら一緒に家出をしてあげようということになったようである。実際にはAがひとり先行し、B・Cは脱落した形になったわけだが、Aが家出したその当日の夜、Aの両親が文字通り半狂乱の体で八方電話をかけたり捗したりしていた時に、B・C2人とも実にみごとにAをかばい、何も知らないということで押し通した。Aの両親に対してほぼ完璧にAとの友情を發揮した2人は、それぞれ自分の両親に対しても同じように、ほぼ完璧に別の顔でもって対していたのである。後程担任である筆者が、B・Cの親に学校へ来てもらっていろいろと話し合いをしたときにわかったことだが、どちらの親とも、こんどの出来事については、自分や自分の子供はいわば第三者、もっと言えば犠牲者である、という意識を持っていたのである。自分の子供が、友人の家出を思いとどまらせる勇気を持っていなかったこと、そればかりか安っぽい間違った友情で問題をより大きくしてしまったこと、それらのために自分の親に対してもたくさん嘘や秘密を持つに至ったこと、それらに気が付いていなかったのである。自分の子供の部屋の中へも容易に入れないので、変に遠慮をし機嫌をとる。そういう親が多くなってきていている。過保護と自信喪失が同時に深く進行しているのである。

「まとめ」ふうに

「うちの子はもう親が何を言っても聞いてくれません。ひとつ先生の方から言ってやって下さい。先生の言うことなら聞くと思いますので。」父兄会の時などに親からよく言われる言葉である。「おたくのお子さんはどうも数学が遅れているようです。しっかりがんばって取り返すようにして下さい。」やはり教師が親

に対してよく言うセリフである。どうしてこんなことになってしまったのだろうか。全く逆ではないか。家庭は巣の場、学校は学習の場、そういうふうに固定的に考えることは、必要でもないし正しくもないだろうが。

家庭と学校の協力は大いに必要だが、同時に分担も必要であり、それぞれの守備範囲というか責任というものもあるはずである。自分の手に余ることを相手に任せる。押し付けるというのは、協力とは言えないであろう。

「よい先生に持っていただきて親も子供も喜んでおります。」とか、「この子はやればできる子だと思うのですが。」とかいうような、意味の無いお世辞や、なれ合いのつきあいはほどほどにしなければなるまい。ことさらに悪口を言い合う必要はないが、それにしてももっと厳しい会話が親と教師との間で行われるようにならなければならないと思う。どういう点がどういう意味でよい先生であるのか、具体的に言うべきだし、気になっている点、疑問の点、改めて欲しい点、希望注文等親は教師や学校に対してたくさんのものを持つ

ているはずである。教師の方も、親がこれまで子供をどういう方針で育ててきたのか、それに対する感想・意見を率直に言うべきだし、どこをどうがんばればいいのか、これも具体的に言わなければならない。

子供は人質でもないし、教師の飯のタネでもない。親と教師の、そして社会の、共有財産であり、親と教師とは、子供に対して最も直接的に責任を負わねばならぬ大人なのである。

VII おわりに

「多層化」の実態を、はっきり浮び上らせることはできなかった。日常の教育活動の記録を報告するにとどまっている。各場面での、記録を分析し、それを総合して一つの実態を把握することが残されている。実態が克明に明らかにされれば、その中におのずと、その背景や原因が潜んでおりそれをつかみだし、対応策を考えることは容易であろう。しかしその対応策を実践に移すことは容易ではない。容易ではないが実践しなければ、これらの研究調査は無意味になる。われわれグループは、その実践報告ができる日を期している。